

### 「母ちゃんハウスだあすこ」沿岸店 待望の開店 岩手県・JAいわて花巻 ～震災から5年、「結いの心」の新たな拠点づくりが始動～

調査研究部 震災復興調査班  
(文責：研究員 上田 晶子)

#### 目次

- |                  |                     |
|------------------|---------------------|
| 1. はじめに          | 3. だあすこ沿岸店 復興の拠点が始動 |
| 2. 直売所の原点は「結いの心」 | 4. まとめ              |

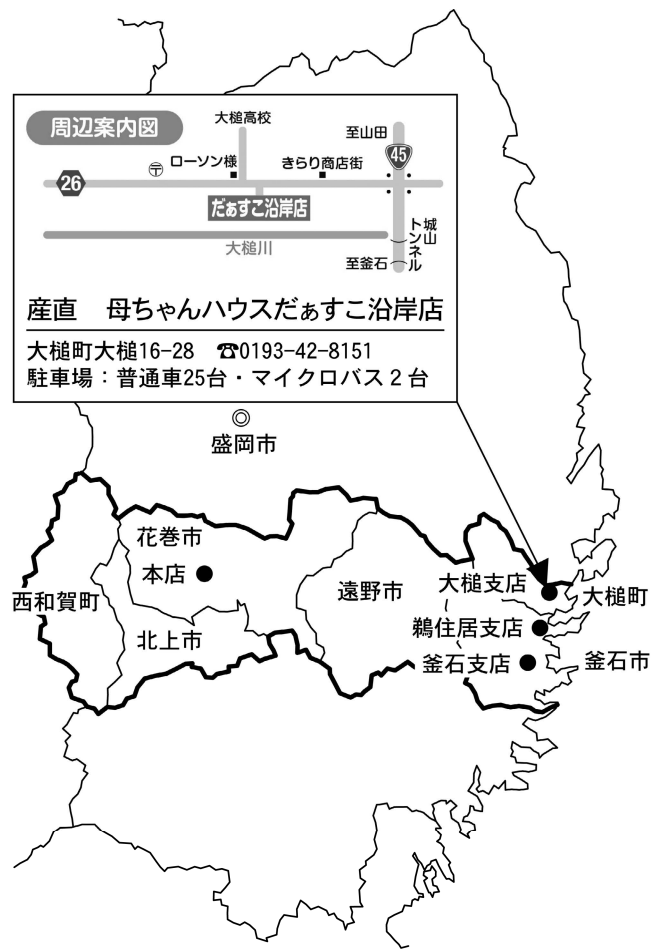
#### 1. はじめに

岩手県<sup>おおつち</sup>大槌町では地域農業者の経営技術、生産技術等の向上に資するための拠点施設「大槌町沿岸営農拠点センター」が完成し、2016年1月15日にオープンしました。本センターは大槌町の施設ですが、JAいわて花巻が指定管理者となって運営しています。

施設内にはJAの大槌支店（金融店舗）、東部営農センター、そして農産物直売所「母ちゃんハウスだあすこ」沿岸店（以下、だあすこ沿岸店）が併設されています。国道45号線近くに位置し、2018年には三陸沿岸道路・大槌ICが開設予定で交通の便がさらに良くなることから、町は農業復興のシンボルとして期待を寄せています。

既に本誌No.127（2013年6月）、No.139（2015年6月）では、津波で壊滅的な被害を受けた沿岸部の釜石・<sup>うのすまい</sup>鶴住居・大槌支店の営業再開、園芸振興と直売所の新設、背景にあるJAの地域貢献活動についてお伝えしました。

本稿ではその後の動向として、開店から半年を経過しただあすこ沿岸店に注目し、直売所等を核とした沿岸部の園芸振興と地産地消の取組みについて報告いたします。



岩手県・JAいわて花巻

## 2. 直売所の原点は「結いの心」

沿岸復興支援の陣頭指揮を執る高橋専太郎組合長。JAトップの強力なリーダーシップのもと、「沿岸部の農業復興には、産直をテコに園芸振興対策に力を入れよう」と、JAの全職員に大号令を自ら発した。それから5年5か月。復興のシンボルとしてだあすこ沿岸店のオープンを誰よりも喜んでいるのは、高橋組合長本人だ。

「だあすこ沿岸店は）まだまだ物が足りない。もっと作り、産直で稼げとハッパをかけている。JAはハウスを無償提供した。沿岸部は暖かい。野菜などの栽培に適している。生産拡大には園芸技術のノウハウが欠かせない。そのためにも、JAは営農指導のOBも派遣するなどしている。自分で作ったものは、地元の方々に食べてもらうことを徹底したい」と、高橋組合長は地産地消運動の推進に力を込める。

1997（平成9）年6月、JA直営の本格的な農産物直売所として全国に先駆けて「母ちゃんハウスだあすこ」が、当時のJA花巻市本店内にオープンした。その直売所の原点、震災復興の根底になっているのは、高橋組合長のかねてからの持論である「結いの心」だ。高橋組合長は「直売所は生産者と消費者が交流するふれあいの場、コミュニティづくりの場にもなっている。みんなの力を合わせることによって協同組合の理念が発揮される。それが結いの心、人のつながりだ。相互扶助、助け合いの精神だ。これを大事にするところに農協の価値がある。農村の精神文化と日本人の心の原点は結いの心だ。これを忘れてはいけない」と説く。

JAいわて花巻が2008（平成20）年5月に広域合併して今年で9年目。この間、世界的金融危機のリーマンショックや東日本大震災



JAいわて花巻 高橋専太郎組合長

があり、大変な事業環境だったが「JAは1回も赤字を出したことはない。何よりもそれが大きなことだと思う」（高橋組合長）。JAの特色は、管内27支店を活動の核としていることだ。支店長が中心となり、「支店の行動計画」を樹立している。その取組みの一環としてくらしの活動の「ふれあいプラン」がある。これらは、常に産直事業をテコに地域住民と一体となった震災復興に反映されている。

「結いの心」の精神はJA管内だけにとどまらず、広がりをみせている。姉妹提携している神奈川県・JA横浜とは、自然災害などの際に被災者を受け入れる「災害支援協定」を結んでいる。また、農家・組合員と共にJAが手がけているグリーン・ツーリズムには、全国各地から大勢の小学生が泊まりにやって来る。高橋組合長は「災害が起きたときには来てくださいと、支援のための準備として災害支援積立金に取り組んでおり、2億5千万円が目標額です」と意気込みを語る。また、火山活動の活発化で観光客が激減した神奈川県箱根町のホテルに昨年10月から、地元花巻市産の「ひとめぼれ」を届けている。震災を機に同町ホテルと支援交流がある花巻温泉箱根応援団と連携した“つながり”の結果だ。

### 3. だあすこ沿岸店 復興の拠点が始動

#### (1) だあすこ沿岸店の概要と特色

だあすこ沿岸店は「大槌町沿岸営農拠点センター」1階に産地直売所、6次加工室、食堂等(866.82㎡)、2階に営農研修室(196.20㎡)を擁する。営業時間は4月から11月は午前9時から午後6時まで、12月から3月は午後5時までである。

だあすこ本店との共通点は、食堂を併設し、食材の調理を通じた消費が行われていること、管内産のみならず産地間交流を行うJAからも製品の提供を受けていることである。

これに対し大きな違いとしては、新おおつち漁協と連携して鮮魚・水産加工品を扱っていることが挙げられる。JAの沿岸産直部会には、漁業者が生産者扱い会員として加入している。旬の獲れたての地元産魚介の冷凍加工品は解凍後も刺身同様の新鮮な味わい。干物も悪天候の際は店頭には並ばない。高品質を維持しながら手頃な価格で商品を提供していることも沿岸店の特色となっている。

3月に着任した沿岸店・藤原吉秀店長によれば、だあすこ沿岸店のオープンが冬だったこともあり、当初は花巻のだあすこ本店から多くの野菜を調達していたが、6月になって地元産の占める割合が約半分まで増えたという。現在も毎週月・水・金曜日に本店に仕入

れに行っているが、「JA産直をうたう以上は、大槌町産を切らさないようにしたい」と、野菜も地元産にこだわる。

だあすこ沿岸店の1日平均の来店者数は現在200人程度であるが、300人を目標としている。周辺には未だ仮設住宅があり、さら地状態からかさ上げ工事が進んでいる中で、地域住民へのPRも課題である。「公共施設内の店舗なので行政との調整が必要だが、JAの経費で案内の看板やのぼりを立てたい。またカーナビの電話番号検索の対応なども検討しなければならない」と藤原店長は語る。

5月からは藤原店長の発案で、東日本大震災が発生した3月11日にちなみ、毎月11日に「特売感謝デー」と銘打ったサービスを行っている。さらに7月からは地域住民に対する広報用に地図入りのチラシを手作りし、新聞折り込みを始めている。

開店から約半年を経て、JA女性部をはじめとした団体の視察も増加し、6月は11団体を受け入れた。本店営農推進部・葛巻繁幸産直課長は「沿岸店には本店が培ってきたノウハウをつなげていきたい。どこにも負けない店を作ろう、と職員に呼びかけています。まずは元気な挨拶の励行です」と意気込む。JAいわて花巻職員が共有する協同の心は、本店から新店舗へと確実に引き継がれている。



だあすこ沿岸店 外観



だあすこ沿岸店 売り場

## (2) 震災直後からコミュニティを支えてきた「結いの心」の産直事業

大槌町は震災で町内の75%が津波に流され、沿岸部は甚大な被害を受けた。同時に内陸部の農家は生産を継続できたものの、販売先を失ってしまった。震災直後から産直と宅配事業に取り組んだのが「農事組合法人 結ゆい」(2010年結成、以下結ゆい)である。

結ゆいは2011年7月にはJAの大槌支店内に仮設販売所を設けるとともに、町内に49か所あった仮設住宅で物資不足に悩む被災者の要望もあり、日用品も含めた宅配も開始した。

5人で車両2台を駆使し、1軒1軒御用聞きを行うことから信頼関係を築いていった。当時の様子を結ゆい元従業員の佐藤祐子氏は「何より良かったと思うのは、仮設暮らしの住民同士の交流も深まるきっかけになったことです」と語る。訪問から会話が生まれ、新たなコミュニティが形成された。例えば高齢者から地域に伝わる農産物の調理方法を教わることもあった。

なお、結ゆいは現在「大槌結ゆい」として生産活動に特化している。だあすこ沿岸店開店に伴い、宅配等の産直事業はJAに移管したため、佐藤氏はJA職員として、だあすこ沿岸店で引き続き産直事業に携わっている。



だあすこ沿岸店(写真左から)  
北田恵美子氏 佐藤恵美子氏 佐藤祐子氏

## (3) 園芸相談会・現地栽培指導会を通じて、沿岸部農家の新たな挑戦、園芸振興を支援

だあすこ沿岸店は、本店同様に周年出荷を目指している。JAいわて花巻が沿岸地域の少量多品目栽培を中心とした園芸振興と農業技術向上を図るために取り組んでいるのが、園芸相談会と現地栽培指導会である。

園芸相談会は年4回開催されている。今年最初の相談会は6月21日に2階の営農研修室で開催され、農家等30人(うち10人は女性)が出席した。だあすこ沿岸店の藤原店長、JAのOBの営農相談員、岩手県農業改良普及センターの職員などが講師を務め、沿岸店の売り場で手薄な品目(当日はミニトマトやネギ、ミニハクサイなど)を中心に、栽培方法や需要見通しなどを詳しく解説した。

現地栽培指導会は毎月実施される。6月27日は大槌結ゆい・佐々木重吾代表の圃場でタマネギ栽培の指導が行われ、新たな品目に挑戦する20人が参加した。花巻から週2回大槌に通い、だあすこの出荷農家でもあるJAのOBと、岩手県と震災復興の協力関係にある岐阜県の普及員が懇切丁寧に指導にあたった。町内の農事組合法人と内陸の営農指導員、他県からも支援を得ることで、さらなる生産拡大を目指している。



農事組合法人 大槌結ゆい(旧・結ゆい)  
佐々木重吾代表

(4) 6次産業の場で、新たな「名物」が誕生

だあすこ沿岸店には食堂が併設され、岩手県産の木材を使用し、故郷の川に戻ってきた鮭をイメージしたデザインのテーブルと椅子が28席設けられている。平日の昼食時には復興工事関係者やJA職員など60～70人が来店する。団体客には2階研修室で対応している。

メニューは直売所にも並ぶ地元産の食材が中心で、「日替わり母ちゃん定食」は地元の新鮮な農産物をたくさん味わってもらいたいとボリューム感があり、米飯のおかわりは自由となっている。このほか、三陸産のイカと大槌町産のキャベツとシイタケを使用した「いか餃子」も単品・定食ともに人気を集めている。

直売所の惣菜コーナーでも冷凍した餃子のほか、6次加工室で作ったイカリング、アスパラ巻きなどが販売されている。

JAではもともと、地域の農産物の需要・消費拡大を図るために、地元の食品加工会社等と共同で様々な商品開発を行ってきた。現在も新商品開発や品質向上に努めており、それらがだあすこ沿岸店や地域にとって新たな「名物」となることを目指している。

特に野菜とJAいわて花巻の子会社が扱うヨーグルトを素材とした「野菜まるごとスムージー」は産地復興の<sup>のろし</sup>烽火であり、意気込みを示すものといえる。

スムージー開発に中心的に携わったのは、JA東部地区営農センターの浦島正一営農指導員である。スムージーの原料で特徴的なのは、野菜を皮ごと低温乾燥させて粉末状にした野菜パウダーである。

「野菜まるごとスムージー」のラインナップのうち、「苺と人参のスムージー」(写真)は、大槌町産のイチゴとパウダーにしたニンジンに蜂蜜を加え、ヨーグルトとともにミキサーにかけたものである。イチゴの香りと程よい酸味が初夏に合うすっきりした味わいとなっており、期間限定で販売されている。

そのほかにも、健康志向に応えた小松菜のスムージーも販売されている。ニンジンと同様パウダーにしてヨーグルトに加えるので、青臭さや苦みが薄まり飲みやすく、冷温両タイプがある。スムージーは1杯350円で、食堂メニューの一環として提供されている。

JAとしても広報誌『ぼらーの花巻』誌上や新聞を通じて、スムージーのPRに余念がない。浦島指導員は「これからも、旬の地元食材にこだわり、新しい季節限定メニューを開発していきたい」と、近い将来の大槌IC開設に向け、だあすこ沿岸店でなければ味わえない、新たな地元の特産品として育てたいという思いを語った。



食堂 (写真提供: JAいわて花巻)



苺と人参のスムージー

#### 4. まとめ

今回の現地調査を通じて、沿岸部でも営農活動が軌道に乗り始めたことを実感しました。また、新たな法人組織等が被災農地を守り、作物の生産・販売拡大の牽引役としての役割を果たしつつあることも確信しました。

沿岸3支店（釜石、鶴住居、大槌）の店舗も、鶴住居支店を除き被災前と同じ場所に整備され、営業に取り組んでいます。「ふれあいプラン」の交流イベントも、これまでは3支店合同で開催してきましたが、今年度からは従来の農家組合組織ごとにまとめ、大槌支店が独自で、鶴住居と釜石の支店が合同で開催する計画です。より一層、組合員等との交流が深まることが期待されます。

被災後の地域コミュニティの再生には、何が必要か。それは、JAいわて花巻が役職員を挙げて取り組んできた沿岸部における農業振興の支援活動の成果によく表われています。正に「結いの心」が具現化しつつあるといえます。これから2018年に予定されている三陸沿岸道路・大槌ICの開設と、2019年のラグビーワールドカップ（W杯）日本大会の釜石での開催が、道半ばの復興を進展させる弾みとなることでしょう。

今後とも引き続き現地調査を進めてまいります。



鶴住居支店（写真提供：JAいわて花巻）

#### （謝辞）

大変お忙しいところを聞き取り調査にご協力いただき、関係資料をご提供いただきましたJAいわて花巻の高橋専太郎組合長はじめJA役職員の皆様、農事組合法人大槌結ゆいの佐々木重吾代表はじめ農家の皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

\*本レポートは2016年6月21-22日、27-28日に行った現地調査に基づいて、とりまとめたものです。

#### （参考資料）

- ・JAいわて花巻『第18回通常総代会資料』（2016年5月28日開催）
- ・JAいわて花巻『平成28年度～平成30年度第3次中期経営計画：地域とともに歩み、活力ある農業を次代へ』
- ・JAいわて花巻『第3次営農振興計画 販売額250億円へのチャレンジ：地域農業生産力を活かした新たな農業振興への挑戦』
- ・JAいわて花巻広報誌『ぼらーの花巻』2015年9・10月号、2016年2・4・5・6・7月号
- ・JAいわて花巻『職員マニュアル：地域から自慢されるJA 職員が自慢できるJA』
- ・「3.11教訓：内陸から 花巻温泉箱根応援団 支援交流が未来開く」『岩手日報』2016年3月31日 29面特集
- ・「震災月命日は感謝の日 産直が特売、町民励ます」『岩手日報』2016年6月11日
- ・「苺と人参のスムージー誕生 JAいわて花巻 沿岸店で季節限定販売」『日本農業新聞』2016年5月27日 県版岩手